

保育者養成校と保育所における 「ファーストブック」の読み合いについての一考察 —Share Books の概念に着目して—

A Study on the Reading of First Book
in Child Care Training Schools and
Nursery School
— Focus on Share Books —

山村学園短期大学子ども学科
相 沢 和 恵
AIZAWA Kazue

ふたばクラブ東麻布保育園
岡 田 理
OKADA Satoru

1、研究の目的

絵本は、乳幼児の保育にとって欠かせない児童文化財であることは、周知の事実である。幼稚園教育要領¹⁾にも保育所保育指針²⁾にも幼保連携型認定こども園教育・保育要領³⁾にも、領域「言葉」の項目の中に、絵本に関するねらいと内容が明記されている。

前年度の拙稿「保育者養成校における絵本の読み合いについての一考察」(紀要第29号)⁴⁾では、保育者養成校において、絵本の読み合いの授業を通して絵本を読み合う意義を学生が理解し始めた、という考察を得た。将来保育者を目指している学生は、絵本は、読み手と聞き手の子どもとが双方に心を通わせる重要な児童文化財の一つと理解し、絵本を読み合う重要性を認識した。

一昨年の拙稿「保育者養成校における絵本の読み取りとオリジナル絵本製作の意義に関する一考察」(紀要第28号)⁵⁾で絵本には様々なジャンルがある事実を紹介したが、本研究では、絵本の種類の中からファーストブックに着目した。「ファーストブック」またの名称「赤ちゃん絵本」とは、0,1,2歳児を読者対象とした絵本を総称して呼ぶジャンルとその絵本のことである。日本ではここ30年ほどの間に、質量ともに目覚ましい発展を遂げている。近年この乳児向け絵本群の充実ぶりは世界にもそう例はなく(筆者中略)日本の一つの特徴ともなっている、と石井は述べている⁶⁾。「ファーストブック」とは、「子どもが初めて出会う絵本」の意味で、0,1,2歳の子どもの対象とする、というジャンルであり⁷⁾、この発展の背後に「ブックスタート活動」が挙げられる。ブックスタート活動は、すべての赤ちゃんの周りで楽しくあたたかいひとときが持たれることを願い、一人ひとりの赤ちゃんに、絵本を開く楽しい体験と共に絵本を手渡す活動をいう⁸⁾。ブックスタートは1992年に“Share books with your baby!”のキャッチフレーズと共に、英国で始まった。絵本を読む(read books)ではなく赤ちゃんに絵本を開く楽しいひとときを分かち合う(share books)。そのきっかけをすべての赤ちゃんのもとへ届けようと始まった活動は、日本では2000年の「子ども読書年」を機に紹介された。(筆者中略)2001年4月に発足したNPOブックスタートは、日本におけるブックスタートの推進団体として活動の理念を正確に伝え、各地域で充実した活動を継続できるよう様々な事業が行われている。日本は、英国に続いて世界で2番目に「ブックスタート」の活動に全国的に取り組んできた⁹⁾。

日本におけるファーストブックの出版点数は2000年を契機に大きく伸び、2018年現在、1年に約200冊のファーストブックが新刊として出版され、ブックスタートは1,032市区町村(日本全自治体の約59%、ただしNPOブックスタートが活動内容を直接把握している地域数)で実施されるまでになっている。活動を開始する自治体は現在も増え続け、これまでに約600万人以上の赤ちゃんがブックスタートの対象となった¹⁰⁾。

一方で、赤ちゃんに絵本は早すぎるのではないか、ただ絵を見ても意味が分からないだろうし、内容も理解できないのではないか、という疑問を持つ人々も未だに多い。実際に、本学の子ども学科の学生の中にも、「まだ言葉が話せない赤ちゃ

んに絵本を読むことに意味があるのか?」とか、「言葉も分からないから絵本を読んでも意味がないと思う」「絵本という物は子ども達にはやく言葉を覚えさせるために必要な道具の一つだ」「絵本を読む理由は、絵本を通して言葉に慣れさせたり言葉を教えたりするもの」という捉え方をしていた学生が数名いた。図書館の講演会参加者の絵本愛好家や絵本の製作者、編集者から「赤ちゃん絵本は難しい、何故なら、読み手の赤ちゃんから絵本を読んだ後の感想を聞くことが出来ないから」との意見があるという¹¹⁾。

また、ブックスタートの活動に関しての先行研究では、ファーストブックの意味と意義、聞き手の赤ちゃんにとって或いは活動に参加した保護者にとっての効果、ブックスタートの活動の意義、今後の可能性等に関する研究やレポート等がある。しかしながら、ブックスタートの活動を今後広める立場にあると考えられる保育を学ぶ学生の立場からの研究や、保育実践の場でのファーストブックを読み合う事例検討は少ない。

そこで本研究では、以下の2点について明らかにすることを目的とする。

①ブックスタートの活動を進めている自治体のDVDを学生が視聴してどの様な気付きや考えを持つか、併せて②保育所の現場で乳児クラスの子どもに保育者が実際にファーストブックを読む場面を事例として取り上げ、個別に保育者と子どもが1対1で読み合う、或いは集団で保育者1人が数名の子どもと読み合う場面や、聞き手の子どもの年齢や居住地よりの差異はあるのかを明らかにする、である。

II、研究の方法

研究の方法としては、保育を学ぶ子ども学科の学生を対象としたアンケートと、実際の保育所での事例研究を併用する。

1. 保育者養成校でのアンケート

<対象者>

- ・山村学園短期大学子ども学科1年生 保育内容「言葉」の授業、受講生65名

<方法>

- ・授業内にてDVD「ブックスタート しあわせ広げる愛情ことば」視聴後、各自気付きや感想、考えた事、疑問点等を20分間で自由記述した書面を提出した。
- ・2019年4月26日 10:40～12:10 1,2組 13:00～14:30 3,4組

<DVD「ブックスタート しあわせ広げる愛情ことば」の内容>

- ・滋賀県長浜市、北海道恵庭市、千葉県鎌ヶ谷市、長崎県南島原市等の事例を中心に、赤ちゃん絵本を楽しむ体験をプレゼントするブックスタートの活動を動画で紹介した作品。ブックスタートの活動に込められた地域の様々な部署で働く人々や市民ボランティアの思いや、実際の取り組みの様子が詳しく紹介されている。特に、聞き手の赤ちゃんに読み手がファーストブックを読む様子を近くで保護者が見ているその後感想を述べるシーンや、家庭に帰った後も親子で受け取った絵本を繰り返し読み合う情景が映し出されている。2013年49分カラー 企画・発行 NPOブックスタート

<分析方法>

- ・分析データの抽出

学生が提出した書面から

- ①聞き手の赤ちゃんにとっての意味、意義
- ②保護者、特に母親にとっての意味、意義
- ③聞き手の赤ちゃん、読み手、絵本の読み合いを見守る保護者(特に母親)の表現や表情
- ④ファーストブックの絵本が持つ力への気付き
- ⑤自分が読み手になった時どう読むかについて
- ⑥ブックスタートの意義

の6項目に関連した内容を抽出することとした。この抽出作業に関して、出来るだけ学生の記述に忠実にするものの、内容に複数の項目が含まれる場合は、1つの項目に複数の内容を含まないように項目を分割するよう努めた。

- ・カテゴリー化

抽出された①から⑥の項目に対して、項目内容の類似点・相違点に基づく論理的連関からカテゴリー分類を行い、分析を行った。

Ⅲ、結果と考察

①聞き手の赤ちゃんにとっての意味、意義

「赤ちゃんは全てが初めてのものなので、興味が湧くのだと思った」
「赤ちゃんはきっと絵を見ながら色々な感性を磨いているのだろう」
「子どもが絵本を指差したり、体全体の動きで楽しい気持ちを表したりしていた」
「どんなに小さい子どもでも、その子に合った絵本の楽しみ方があると気付いた」
等が挙げられた。

未だ言葉の理解が不十分な幼い子どもでも、自分なりに絵本に興味を示し、読み手や傍にいる保護者に身体全身を使って楽しい気持ちを伝えようとしている姿を捉えた記述である。子どもの発達年齢、生活年齢、おかれた環境等の其々の個別な事情について、映像を通して理解しようとする学生の記述である。

②保護者、特に母親にとっての意味、意義

「子どもが嬉しいと親にも嬉しい気持ちが伝染していくことが分かった」
「保護者の方も自然と笑顔になっていて微笑ましかった」
「赤ちゃんに絵本を読むことはとても大切だと気付いたお母さんが多くいた」
「赤ちゃんの楽しいような様子を傍で見てお母さんも、楽しく嬉しくなるということが伝わってきた」
「赤ちゃんとの関わり方に悩んでいるお母さんが、絵本を通じて赤ちゃんに繋がっていくというこの活動が素敵だと思った」
「子どもと保護者の距離が縮まると感じた」
「読み聞かせで子どもの機嫌が良くなると、お母さんも楽になって安心できると思った」
「絵本を通して、赤ちゃんと心を通わせる保護者の為のブックスタート活動であると気付いた」
「慣れない子育てに戸惑う母親や疲れを感じた母親達にとっても、ブックスタートで絵本を読み手から読んでもらえる時間は、日常の忙しさを忘れられる息抜きの時間になるのでは」
等の記述があった。

保育者を目指す学生が、このDVDの映像を観て、保護者の立場に思いをはせて感想を書いた意義は非常に大きいと考える。且つ、保護者特に母親の、育児に対する喜びや逆に負担感等を、学生自身の我が事に引き寄せて考えるきっかけが、絵本を読み合う映像のシーンだったことも大いに興味深い。ブックスタートの活動そのものや、そこで選ばれているファーストブックが持つ力、さらには読み手の絵本への心の込め方が、学生の気付きをもたらしていると考えられる。

③聞き手の赤ちゃん、読み手、絵本の読み合いを見守る保護者（特に母親）の表現や表情

「小さい子はまだ文字が読めない中、絵だけを見て笑ったりしてとても可愛い」
「絵本に集中している子、読み手を見ている子、笑っている子、等様々な表情が見られた」
「子どもの手がにぎにぎ動いていて、絵本に興味があり触ってみたい気持ちのサインとして現われていた」
「親が、それまでの子育てで見たこともない我が子の生き生きした表情を見ることが出来るのが、ブックスタートの活動の魅力の一つだと思った」
「絵本を見ている子どもの表情を見て、子どもが笑うと親も笑顔になり、とても穏やかな子育ての時間になるだろう」
「絵本を見ながら誰でも笑顔で楽しい気持ちになるのだなと思った」
等が挙げられた。

笑顔、生き生きした表情、穏やかさ、手先の動きでの表現等、映像を観ている側の学生も思わず笑顔になり穏やかな気持ちになったことが伺える記述である。絵本を読み合う意味は、読み手の思いが一方的にあるのではなく、その場にいる者だけでない相互の温かな気持ちの交流が自然と湧き上がる事実を示している。

④ファーストブックの絵本が持つ力への気付き

「眠たそうでぐずっていた子どもが絵本が始まると食い入るように見えて、絵本の力はすごいと思った」
「赤ちゃんは絵本はわからないと思ったが、絵を集中して見ていたり読んでいる人の顔を見たり笑ったり、赤ちゃんの心を引きつけるパワーが絵本にはあるんだと分かった」
「読み手は赤ちゃんにとって初めて会った人なのに、絵本をじっと見たり読んでいる人の顔を見つめたり、絵本に心を通わせていて、絵本の力はすごいと思った」
「文ではなく音や表情、絵を見て楽しんでいるのかなと思った」
「絵本は、読み手と赤ちゃんと母親の3人でひとつの関係が出来、楽しむものだと思う」
「絵本は、言葉の理解度によらず人と人のコミュニケーションのツールになる」
「絵本は人と人をつなぐ大切なものであり、言葉の表現により感性を育むことに繋がる」
等の記述があった。

ブックスタートで手渡される絵本の候補になる「ブックスタート赤ちゃん絵本」(30タイトル)は、3年に1度、独立した中立的な立場で選考会議が行われ、厳選されている。選考は赤ちゃん絵本との関係について豊富な知識と経験を有する5名の委員(乳幼児発達の専門家、図書館司書、保育士等)が行い、出版社やNPOブックスタートの意向が反映されることはない。実際に親子に手渡される絵本は、各自治体で決められる¹¹⁾。厳選されている絵本だからこそ、聞き手の赤ちゃんの心、読み手の心、共にいる保護者の心を揺さぶる絵本であることは事実である。それにしても絵本、特にブックスタートに用いられるファーストブックの底力に注目した学生の記述は、特筆するに値する。

⑤自分が読み手になった時どう読むかについて

「私も赤ちゃんに1対1で絵本を読む時は、この読み手のように笑顔で語りかけるように読みたい」

「実習等で絵本を読む機会があったら、絵本を開くことで誰もが楽しく赤ちゃんとうっかり心が触れ合えるひとときが持てるように、という言葉の意味をよく考えたいと思った」

「成長に合わせて絵本を選ぶことが大切だと学べたので、実習に行った時に実践したい」

「絵本を読む際に一番考えるのは、子ども達を楽しくすることだという事を忘れないようにしたい」

「絵本を読む時、気持ちを込めて読むことの大切さが分かり、これを意識して読みたい」

「子どもの気持ちを引き付ける読み方をマスターしたい」

等の記述があった。

保育者を目指す専門的な勉強を始めて、未だ1か月もたない4月の下旬に、このように将来の自分の姿を想定できることも、この映像を観た良い結果だと考える。この授業の後半では、実際に各自が持ち寄った好きな絵本1冊を2人1組でお互いに読み合う演習を行った。その際にも、どうすれば聞き手に絵本が見やすいか、聞きやすいか、どうすれば絵本の内容が伝わりやすいか、絵本の世界に入り込めるような語りかけるような読み方の工夫をどうしたらよいか等に気を付けて読む、という意識が芽生えていた。映像の中の読み手の姿が、学生にとってとても良い手本になっていたと思われる。

⑥ブックスタートの意義

「子どもだけではなく、絵本の読み合いは保護者にとってもとても大切だと分かった」

「ブックスタートパックを手渡すことで絵本を借りて返すのではなく、ずっと手元にあることで一緒に年を取るみたいでいいなと思った」

「絵本をプレゼントして子育てを応援してくれるのは、とても大切であると思った」

「ブックスタートの活動には色々な人たちが関わっていて凄いなと思った」

「赤ちゃんから保護者の方への笑顔の連鎖が起き、読みたいと思った時に手元にあることが重要である」

「子育てを、地域全体の色々な業種の人たちが協力して支援・応援して行っている」

「保護者、赤ちゃん、図書館員、保健センターの方、ボランティアの方達等様々な人たちとの関わりがあり、赤ちゃんは絵本に触れ合うのみでなく、人との触れ合いの意味もあるのではないかな」

「検診の時だけでなく、その後の図書館でのおはなし会等にも継続的に繋げて絵本を読み合う機会を設けることは、とても良いことだと思った」

等の記述があった。

ブックスタートの制度がある事実を初めて知った学生も多く、それ故かこの制度に対する気付きを記載したものが全体の中で一番多かった。特に、ブックスタートの活動内容の1つである、厳選されたファーストブックを数冊来場者にプレゼントする、事情があって来場できなかった家庭にも届けるという「すべての赤ちゃんのまわりであたたかいひとときが持たれることを願う(筆者中略)絵本を手渡す活動」¹²⁾の理念の素晴らしさを、学生は受け止め文章で表している。

2. 保育所の実践事例

<対象園>

中野区認可保育所 A園

品川区認可保育所 B園

港区認可保育所 C園

<方法>

・東京都内の保育所3園に在籍する乳幼児を対象に、保育者らが絵本を読む。個別に1対1で読み合う、或いは保育者1名が数名の乳幼児と読み合う。読み手は、絵本を読みながら聞き手の乳幼児の様子を観察し、その後行動観察記録を起し、さらに筆者が検討を加えて考察した。

事例として各園が順不同に挙がっている理由は、同じ絵本が続いて述べられるよう配置したためである。

事例①

<対象者> A園1歳児5名 読み手 担任保育士

<場面> 2018年12月下旬 午前中散歩前 9:10~9:15

<方法> A園では、2018年12月の中旬まで何度か絵本「くらくらい」を読み合い、暗がりの中に動物のシルエットが浮かび上がり、「まっくらくらくら、くらーいくらい」「でんきをつけてちょうだい」の言葉が続き、「ついた」の言葉と共にスイッチを操作する動物が現れるという話を子どもたちは知っていた。

すでに何回か読んだ絵本なので、次に出てくる動物の名前を子どもは予想して口々に言い、繰り返しの表現を楽しみながら、それぞれの動物の絵の中の特徴を我先に互いに言い合う様子が見られた。特にスイッチが二つ描かれている、猫の場面では「あっちー」と一方のスイッチを指差して言ったり、電気がついた後の絵で猫が履いているスリッパが魚の形であること(図1)を「さかな」と周りの友達に伝え「ねー」とその情報を共有する姿も見られた。

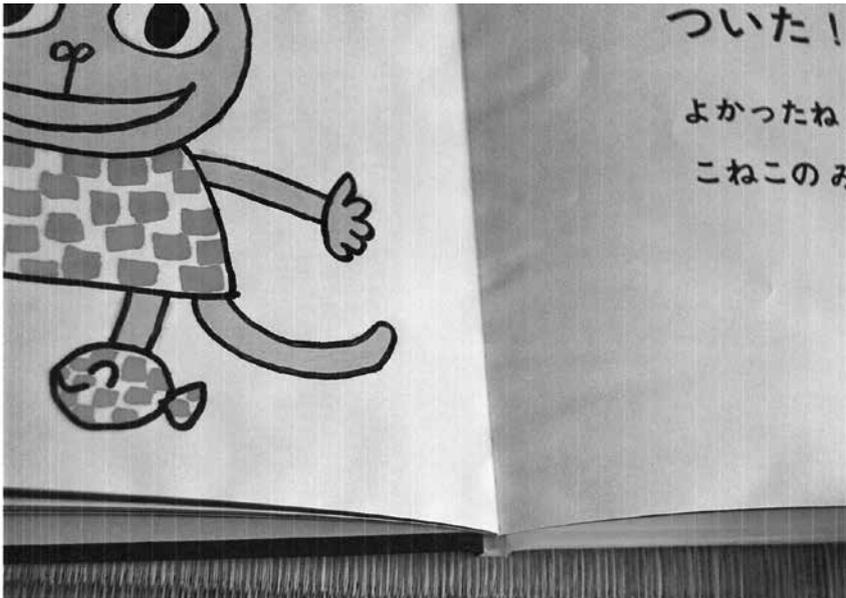


図1

事例②

<対象者> C園0歳児1名 読み手 施設長

<場面> 2019年11月 昼食後 11:45~11:50

<方法> 対象児が初めて見る絵本「くらくらい」は、施設長が何冊か子どもに提示した絵本の中から対象児が選んだものであった。

暗がりの場面では大きな反応はないが、明かりがつくと動物の顔を指差し「あー」「あー」と声をあげる。その度に、施設長が動物に合った名称で「ねこさん」「わんちゃん」などと答えた。対象児は3回ほど繰り返して読むよう要求し、暗がりの場面はすぐに自分でページをめくろうとし、動物の顔を指差して「あー」「あー」と声を上げ、読み手に返答してもらいたい様子を見せる。

事例③

<対象者> A園1歳児5名 読み手 担任保育士

<場面> 2018年9月上旬 散歩前 9:15~9:20

<方法> 「くつついた」の絵本は、2018年9月上旬に、対象児が保育所では初めて見る絵本であった。きんぎょ、あひる、ぞう、さるが次々と左右対称で絵本の見開き部分で身体の一部がつながり、いくつかの生き物がつながった後、母親と子どものほほがつながり、さらに父親のほほもつながるという流れで話は終わる。初めてみる絵本であることもあり1歳児5名からは、声をあげる姿はないものの、生き物が出てきて、「くつついた」というリズムを楽しんでいる様子であった。そんな中親子三人のほほがつながった場面(図2)で、絵本を選んだ子どもが「Aちゃん」と自分の名前を言って赤ちゃんの絵を指さした。この事実を降園の際保護者に伝え、「この本は家でも読んでいて、お気に入りなんです。」との返答があった。

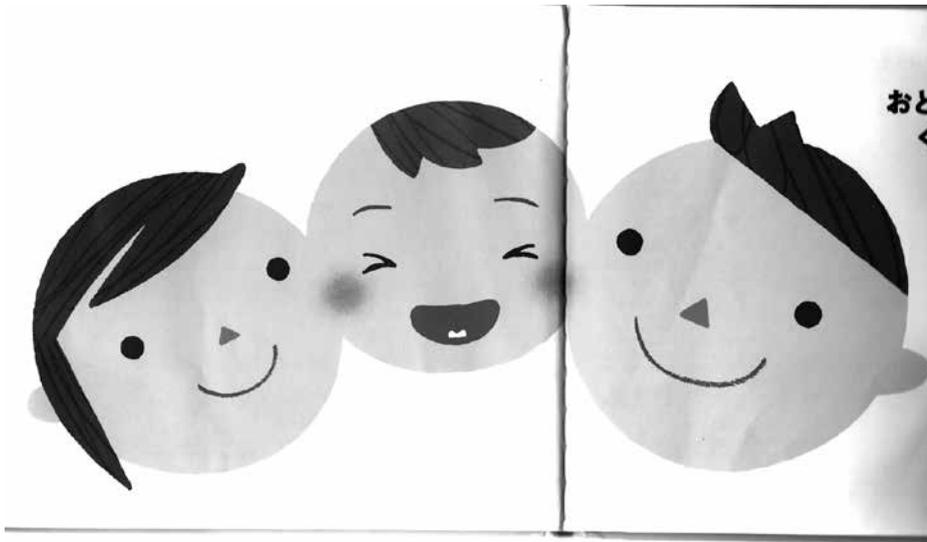


図 2

事例④

<対象> C園0歳児1名2歳児1名 読み手 施設長

<場面> 2019年8月0-2歳児が同じ保育室内で降園前に一緒に遊んでいる際 17:00~17:05

<方法> 2019年8月2歳児が「くっついた」の絵本を施設長に渡し、その絵本を0歳児と一緒に見る。

2歳児はすでに内容を覚えていて、「くっついたー」のセリフを施設長よりも先に声に出し繰り返しを楽しむ。横で見ていた0歳児も最初はただ見ているだけだったが、2度目に読んだ際は「くっついた」の最後の音である「たー」を2歳児と一緒に声に出し楽しむ。

事例⑤

<対象> C園2歳児1名 読み手 施設長

<場面> 2019年9月0-2歳児が同じ保育室内で降園前に一緒に遊んでいる 17:05~17:10

<方法> 「しっぽがぴん」の絵本は、キツネ、猫、カメ、の動物の絵が順に描かれ「しっぽがぴん」「しっぽがたたり」「ぴんもたたりもできるのよ」という言葉の繰り返しがあり、最後に「ぴんもたたりもあっぱれよ」で締めくくられる。

対象児は、絵本のストーリーではなく描かれた動物の大きさに注目していて、絵本の見開きに描かれていると(図3)「長い」それぞれのページに分かれて描かれると(図4)「長くない」と繰り返し言い、描かれた動物のしっぽについては全く興味を示さない。一度読み終わった後に、もう一度読むよう要求し、読み手が再度読んだ際、今度はそれぞれの動物が眼を開けているか閉じているかに注目し、「起きてる」「寝てる」ということをそれぞれの場面で口にして、最後までしっぽに興味を示すことはなかった。

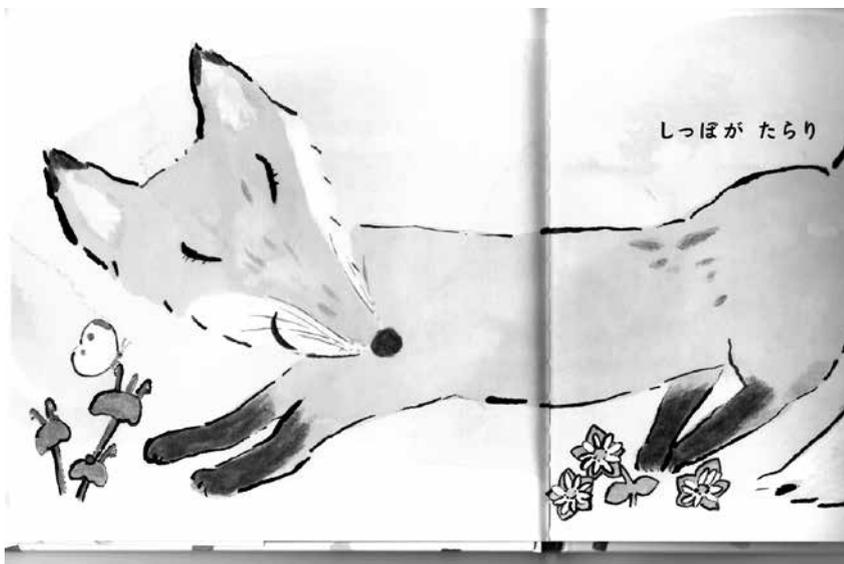


図 3



図 4

事例⑥

<対象> C園0歳児1名 読み手 施設長

<場面> 2019年9月0~2歳児が同じ保育室内で降園前に一緒に遊んでいる 17:15~17:20

<方法> 絵本「しっぽがぴん」。同じ絵本でありながら0歳児は「ぴん」という言葉に反応し自ら「ぴん」と口にし、同時に動物の顔を指差し、しっぽには大きな興味を示すことはなかった。

事例⑦

<対象> A園1歳児5名 読み手 担任

<場面> 2018年12月おやつ前 15:05~15:10

<方法> 絵本「しっぽがぴん」対象児5名は静かに見ていたが、反応はあまり無く、「ねないこだれだ」を読んでほしいと要求する。

事例⑧

<対象> B園3歳児8名 読み手 主任保育士

<場面> 2017年10月 給食前 11:30~11:35

<方法> 絵本「ほんちんぱん」。主任保育士が読む前に「パン屋にお買い物」の手遊びをしてから読み始めたためか、「パンパン〇〇ほんちんぱん、ちぎちぎぱっぱでほんちんぱん」という絵本の言葉のリズムに対して、「食パン」「ロールパン」「ドーナツ」「フランスパン」「アンパン」等出てくるパンの種類（図5）の名前を口々に言い合う姿が見られた。

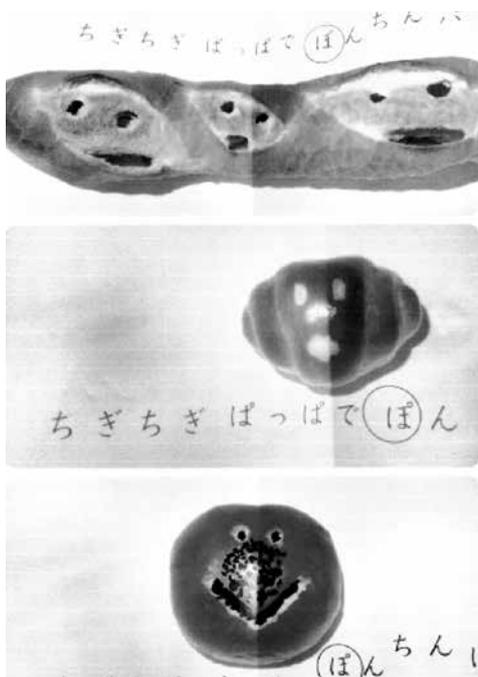


図 5

事例⑨

<対象> C園1歳児1名 読み手 施設長

<場面> 2019年9月 午睡前 11:50~11:55

対象児は事例①～⑧とは違い外国籍の1歳児で、自分から「ぼんちんぱん」の絵本を持ってきて読むよう読み手に差し出す。

「ぼんちんぱん」の言葉に合わせて笑って絵を見ている。その後も眠ることなく、「ぼんちんぱん」の言い回しを自分で繰り返し言いながら、体を左右に揺らして楽しむ。

事例⑩

<対象> A園0歳児4名1歳児5名 読み手 1歳児担任

<場面> 2019年1月 午睡前 11:20~11:25

0歳児と1歳児が合同で、絵本「ぼんぼんポコポコ」を見る。「ぼんぼんポコポコ」の言葉の繰り返しを0歳も言葉で言い、1歳児は次のページに出てくる動物を先取りして名前を言う。また、絵本の終盤で、お父さんが子どもを膝に乗せてだっこする場面(図6)では「パパ」「とーと」等、家での父親の呼び方をそれぞれの子どもが口にし、読み手が「嬉しそうだね」というと笑顔でうなづく。



図6

事例⑪

<対象> C園2歳児1名読み手 施設長

<場面> 2019年6月 0~2歳児4名が同じ保育室内で登園後に一緒に遊んでいる際 8:45~8:50

<方法> 2歳児が自分で絵本「ぼんぼんポコポコ」を選び読み手の膝に座る。動物の手とおなかを見て、「たぬき」「かえる」と言い、読み手が「あたりー」と答えることが楽しいのか3回繰り返して読むよう要求する。

最後の回では、赤ちゃんが膝に乗る場面で、読み手が2歳児のお腹をくすぐると、大声をあげて笑いながら、「あー楽しかった」と言って自分から絵本を片付ける。

事例⑫

<対象> C園1歳児1名 読み手 施設長

<場面> 2019年10月 午睡中 12:30~12:35

<方法> なかなか午睡の時間帯に寝つけなかったため、午睡部屋の隣の保育室で対象児が選んだ絵本「おうさんのプー」を読む。周りが寝ていて静かだったので、読み手が小さな声で読むと、対象児も静かに聞いていた。親子三人の場面(図7)で初めて「ママ、パパ、○ちゃん」と言って、読み手の顔を見る。「ママとパパお仕事だねえ」「○ちゃんは？」と尋ねると「ねんね」と言って自ら午睡部屋まで歩いていき布団に入った。

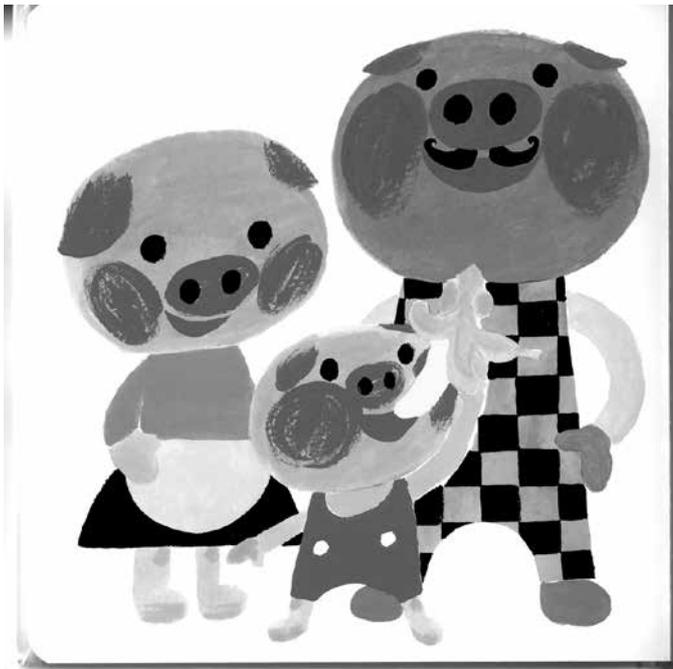


図 7

事例⑬

<対象> C園0歳児1名 読み手 看護師

<場面> 2019年9月 0~2歳児が同じ保育室内で登園後に一緒に遊んでいる 8:30~8:35

<方法> 0歳児が選んできた絵本「あ あ」を看護師が読み語るが、途中で「ぶ ぶ」と読み手が分からない言葉が出てくる(図8)。近くでその様子を見ていた施設長が「お湯のことですよ」と看護師に伝え、「あーこの絵ね」と理解する。このような大人同士のやり取りがあったが、対象児は特に気にする様子はなく絵本を楽しんで見ていた。

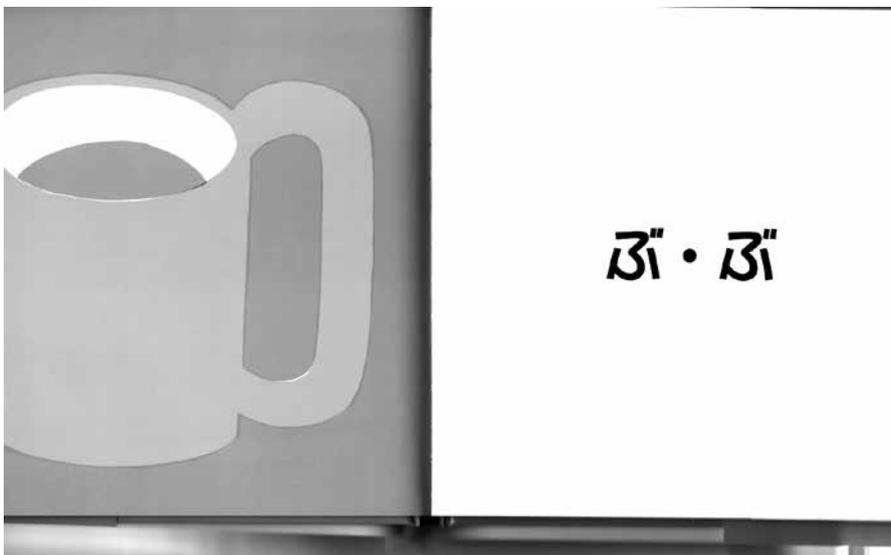


図 8

事例⑭

<対象> B園0歳児9名 読み手 担任

<場面> 2018年2月 発表会 9:30~9:45

<方法> 入園時からの園での生活ぶりを保護者に見せる発表会で「おつきさまこんばんは」の絵本を基に子ども達はおつきさまの役を演じた。保育者が作った衣装を着て座る位置の案(図9)、普段から読み合いで慣れ親しんだ「おつきさまこんばんは」の月の役を演じて見せ、最後は裏表紙のお月様のようにそろってあかんべー(図10)をして終了した。保護者からは「0歳でも絵本の内容を理解して、主人公の月になって発表することが出来るんですね。」という感想が寄せられた。

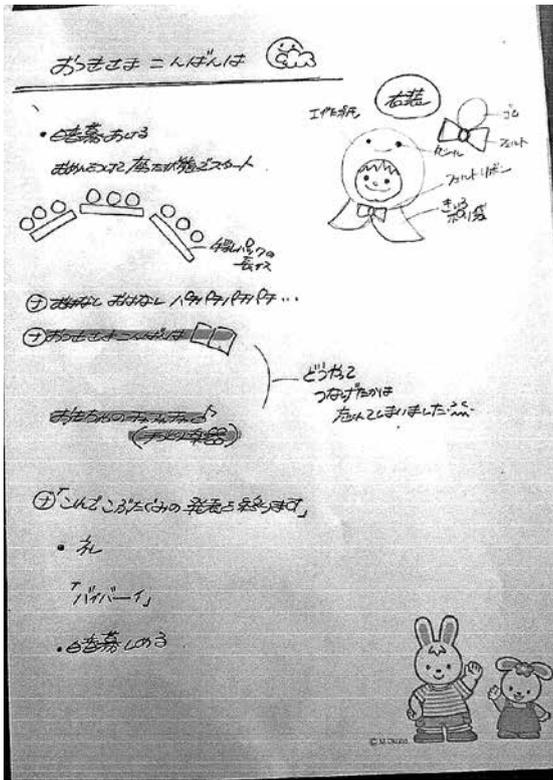


図9



図10

<実践事例の考察>

保育所の現場での実践事例から

- ⑦読み聞かせ対象が1対1の場合と集団の場合の子どもの様子の差
- ⑧対象年齢ごとの差
- ⑨居住地による差異

の3項目について明らかにするとした。

⑦については、1対1での読み合い・集団での読み合い共に、繰り返しの音の表現や自分の知っている動物、家族、食べ物その他の品等が出てくる場面で反応する姿が多くみられるという事が分かった(事例①②③④⑧⑩⑫⑬)。また集団で絵本を見る際は、絵本のストーリーに合わせて口々に言葉を言ったり、次の場面を先に言ったりして、子ども同士で互いの反応を確かめ合う姿が見られた(事例①③④⑧⑩)。1対1で読み合うときは、読み手が子どもの様子に合わせて読み方を変え、それに聞き手が即応し、読み手と聞き手の子どものやり取りが集団で読み合う場面よりさらに深まることも分かった(事例②⑤⑥⑧⑨⑪⑫)。例えば絵本の1つの場面から「長い、長くない」「○ちゃんか?」「ねんね」等のやり取りが生まれ、子どもはより読み合いを楽しんだ。

④については、聞き手の年齢ごとに、絵本への興味の持ち方や、読み手や他児に対する発信の仕方は違った。しかし反応については⑦に示した通り、共にいる子ども同士のつながりや、読み手との即応を楽しむという面で大きな差異は見られなかった。

⑦については、事例対象の保育所3園全てが東京都23区内にある為か、大きな差は見られなかった。

1対1での読み合い、集団での読み合いに関わらず絵本をshareすることに楽しみを見出すためには、良書である絵本の存在が第1義となるのはもちろんであるが、読み手と聞き手と一緒にいる他児との応答性が非常に重要になると考える。絵本の内容について読み手に不十分にしか理解されていない場合でも、自分が好きな読み手の人が読んでくれているという事で、十分に絵本を楽しむという事例⑫もあった。

また、このような絵本の読み合いを重ねた日々の生活の姿を、発表会の場面で改めて保護者に伝えていくことで、読み手と聞き手の子どもが絵本をshareする体験が、楽しくのびのびとした表現活動にもつながるという事(事例⑭)を保育者も保護者も実感出来た。

保育者も保護者も双方が共にファーストブックの読み手となり、聞き手の子どもとの“share books”の入り口になるという事が明らかになった。さらに、保護者から“share books”の大切さについて賛同を得られた意義は非常に大きい。

<ブックスタートに選ばれている赤ちゃん絵本についての考察>

2018 - 2020 ブックスタート赤ちゃん絵本の30冊を実際に読み、それぞれの特徴を調べると様々な気付きがあった。

初版発行年順に記すと、聞き手の赤ちゃんや幼い子どもが日常的に繰り返し楽しむ遊びや、絵本を見て自然に体が動き出すものがテーマになっていると気付く。(文末の参考資料、絵本の表題前に付けた番号①⑦⑭⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕等)未だ言葉は獲得していなくても体ごと遊びや動きを通して楽しさを感じる絵本が、聞き手の幼子にとって親しみやすいと思われる。

併せて、擬音語、擬態語が繰り返され、リズムカルな響きがあるテーマの絵本も長い間の人気である。(③④⑧⑭⑱⑲㉑等)大人にとっては意味不明な音や様相であっても、幼子にとって発音しやすく、物の名前や動きや状態、状況に近い擬音語、擬態語の表現が、絵と共に現れることが楽しいに違いない。

動植物が次々に登場する絵本も、数多く選ばれている。(①②③⑤⑧⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲㉑㉒㉓㉔㉕)食べ物や乗り物に関する絵本も数多い。(②③⑥⑨⑫⑲㉑)お母さんやお父さんと一緒に嬉しい気持ちになるテーマの絵本も、同様に数多くある。(①③⑤⑥⑨⑩⑮⑰⑱⑲㉑)聞き手にとって、日々の生活の中でいつも身近で大好きな物や者が主人公だったり、次々と登場したりするので、聞き手だけでなく読み手も親近感を覚えて、絵や内容に引き込まれるからであろう。

絵本のサイズは、幼子の手丁度良い物や、抱かれて読むのに適したサイズや、少ない何人かの聞き手を前にして読むのに適したサイズで作られている。また、再販のものはみなハードカバーになっており、繰り返しの読み合いに堪え、少しくらいなめられたりかじられたりしたところでさほど傷まない丈夫さを兼ね備えている。

文は、単純な繰り返しの語り、または前述したオノマトペ、または質問形式で聞き手が答えを想定しながら楽しむものが多い。絵は、ほとんどが、明るい色彩で且つ明確で単純な形で、分かりやすく描かれている。はっきりした色、シンプルな形、優しい表情や分かりやすい動きの絵は、聞き手の幼子が絵本の絵そのものを楽しむ大切な要素である。併せて、二場面一単位の展開方法になっており、絵そのものと絵本の内容の双方が、読み手にとっても理解しやすい作りである。

この「親しみやすさ」「分かりやすさ」と併せて「安心感」も必然の要素と考える。繰り返されるテーマ、楽し気な雰囲気、美味しそうな様子、始まりから最後まで順序正しい時間の流れ、笑顔、抱っこ、おんぶ等、読み終えた後に必ず訪れると予想出来るホッとする安心した気持ちが、読み手にも聞き手にも伝わる。

幼子は、生活を共にしている人、多くの場合、父親、母親、兄弟姉妹、祖父母、通所している場にいる保育者が、楽しみに絵本を手に取り幼子と一緒に読めば、心底楽しい。ブックスタートの理念である、絵本の楽しさを読み手と聞き手が共有(s h a r e)するブックスタートに相応しい「赤ちゃん絵本」を、赤ちゃん絵本との関係について豊富な知識と経験を有する専門家が、吟味し厳選して、30冊提示している所以である。

IV、研究のまとめと総合考察

本研究は、保育者養成校の学生がブックスタートの活動のDVDを視聴し、活動の重要性に気付いたことを明らかにし、保育所における実践事例から、読み手と聞き手のリアルタイムでの応答性の大切さや1対1で読み合う意義と集団で読み合う際の共感性の有りようから“ShareBooks”の理念に繋がる事実を探った。

学生の気付きでは、今回視聴したDVDはブックスタートの単発の活動ではあったが、連続した保育現場での読み合いの重要性や、厳選された絵本を繰り返し読み合う大切さを理解する事柄が見出せた。併せて、学生自身が気付いた実習に出る際の絵本の読み合い方の配慮点は、保育の現場でも当然ながら常に求められる、保育内容に対する日々の省察と次の

保育への手立てに結びついている。

また、保育所ではなかなか出会えない、我が子が他者、保育所の場合は担任や主任保育士、施設長等と絵本を読み合う楽しさを機会あるごとに捉えて保護者に伝えていく重要性も示唆された。ブックスタートの活動で、絵本を他者と読み合う我が子の生き生きとした表情への気付きや嬉しい気持ちを、DVDを観た学生も保護者自身も気付いていた。

V、今後の課題

絵本の読み合いにとって、特にファーストブックに着目して論を進めてきたが、ブックスタート活動のDVD視聴での考察、保育所の実践事例での考察でも述べた通り、読み手がリアルタイムで聞き手の表情や状態を見て読み方を応答的に変化させる重要性が挙げられた。

今後は、デジタル絵本・電子絵本やアニメーション化されたビデオ絵本、音響機材を併用しての絵本の読み合い等についてのメリットとデメリットについても検証する必要がある。

併せて、ブックスタートで厳選されたファーストブックについて、その魅力を子ども達と読み手が共に楽しむことの大切さを、保育者養成校、保育現場、保護者それぞれに対して広く伝えていくことが課題となる。

謝辞

2019年度1年生「保育内容 言葉」の授業に於いて、絵本だけではなく、手遊び、言葉遊び、等の保育教材と一緒に学んだ学生の皆さんから様々な感想や意見を貰いました。ありがとうございました。

また、2018年度第5期絵本専門士の公開講座で、様々な角度からブックスタート活動について教授して下さった講師陣の先生方に多大なるご教示とご指導を頂きましたことを、心より感謝致します。

【註】

- 1) 文部科学省 (2017年) 『幼稚園教育要領』
- 2) 厚生労働省 (2017年) 『保育所保育指針』
- 3) 内閣府 (2017年) 『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』
- 4) 相沢和恵・岡田理 (2019年) 「保育者養成校における絵本の読み合いについての一考察」
『山村学園短期大学紀要』(第29号)
- 5) 相沢和恵 (2018年) 「保育者養成校における絵本の読み取りとオリジナル絵本製作の意義に関する一考察」
『山村学園短期大学紀要』(第28号)
- 6) 藤本朝巳・生田美秋 編 (2018年) 『絵を読み解く 絵本入門』 ミネルヴァ書房
- 7) 生田美秋・石井光恵・藤本朝巳 編著 (2013年) 『ベーシック絵本入門』 ミネルヴァ書房
- 8) NPO ブックスタート 編著 (2014年) 『ブックスタートがもたらすものに関する研究』 NPO ブックスタート
- 9) 前掲 『絵を読み解く 絵本入門』
- 10) 前掲 『ブックスタートがもたらすものに関する研究』
- 11) 絵本ナビスタイル (2019年) 東京都小平市立図書館後援会 『赤ちゃん絵本のパワー』

【参考文献】

- 松居直 (2018年) 「絵本はへその緒」 NPO ブックスタート
- 田島信元・秋田喜代美 編 (2018年) 「歌と絵本が育む子どもの豊かな心」 ミネルヴァ書房
- 秋田喜代美・増田時枝 (2009年) 「絵本で子育て」 岩崎書店
- 松岡享子 (2019年) 「母の友 特集“面白い絵本ってどんな絵本？”」 福音館書店
- カーサ ブルータス特別編集 (2015年) 「読み継ぐべき絵本の名作200」 マガジンハウス
- 「2017年度版 赤ちゃん絵本のたのしみ」(2017年) 福音館書店
- 「ミリオンぶっく 2019」(2019年) TOHAN
- 佐藤朝美、佐藤桃子 (2013年) 「紙絵本との比較によるデジタル絵本読み聞かせの特徴の分析」 『日本教育工学論文誌』(37)

【参考資料 ブックスタート絵本書誌情報】

2018年から2020年に「ブックスタート赤ちゃん絵本」で選書された30冊を、筆者が図書館等で実際に読み、それぞれの絵本の特徴を調べてリストアップしまとめたものを付記する。(①～⑩は初版発行年度順)

保育所の実践事例で取り上げた絵本は⑪⑬⑮⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚である。

①「いない いない ばあ」松谷みよ子／文 瀬川康男／絵 (童心社) 1967年

猫が1ページ目で「いないない」と言いながら手で目を隠し、ページをめくると大きな文字で「ばあ」と言いながらにっこり笑った顔で現れる。続いてくま、ねずみ、きつね、のんちゃんも同じように「いないない」「ばあ」。見返しの表裏部分には、ねずみが右方向に走っていく絵が描かれ、絵本を読み進める仕掛けになっている。聞き手の赤ちゃんにとって期待した通りの展開が明快で、心から楽しめるシンプルな絵本である。

②「のせて のせて」松谷みよ子／作 東光寺啓／絵 (童心社) 1969年

まこちゃんが自動車に乗って出発すると、1匹のうさぎ、2匹のくま、お母さんねずみと10匹の子ねずみが次々に「のせて」と車に乗り、あら大変、真っ暗なトンネルに突入。でも大丈夫、皆な自動車に乗ったまま無事にトンネルから抜け出して「さあいくぞ、びゅーん」と、山の向こうの遊園地を目指す。「ぶっぶー」「びゅーん」「まあー」「いくぞ」等の言葉が、まこちゃんと乗せてもらった動物達と読み手と聞き手の気持ちを、自動車が進むスピード感に合わせさらに楽しくさせている。

③「しろくまちゃんのほっとけーき」森比左志・わだよしおみ・若山憲／作 (こぐま社) 1972年

しろくまちゃんがおかあさんと一緒にホットケーキを焼いて、仲良しのこぐまちゃんと一緒に美味しくいっぱい食べたら、最後はお皿を洗っておしまい。筆者拙宅では、2人の息子に繰り返し何度も読み、息子達は「ぼたあん」から「はい、できあがり」までの言葉を全て覚えて、声に出して何度も楽しんでた。絵と、添えられた言葉とが見事に合致して、我が子2人も、仕事で出会った幼稚園や保育所の子ども達も、誰もが大好きな絵本の1冊。

④「もこ もこもこ」谷川俊太郎／作 元永定正／絵 (文化出版) 1977年

しーんという始まりから、シンプルでリズムカルなもこ、もこもこ、によき、によきによき、ぱく、もぐもぐ、つん、ぼろり、ふうっ、ざらざら、ぱちん！ふんわふんわ、しーん、そして続きを予感させる、もこ、という擬音と共に、これらの音にあった今にも動き出しそうな絵が描かれている。仕事先で出会った保育所の0、1歳児は、この絵本を何度も繰り返し見て、ページ毎の絵や音に日々見入り、感じたり楽しんだりしていた。絵を手掛かりとしつつも、子どもこそ、谷川氏の詩の、最大の理解者なのかもしれないと思う。

⑤「どうぶつのおかあさん」小森厚／文 藪内正幸／絵 (福音館書店) 1977年

猫のお母さんもライオンのお母さんも子ライオンをくわえて、サルのお母さんはお腹に子猿をしがみつかせて、チンパンジーのお母さんは子チンパンジーを抱いて、コアラのお母さんは子コアラをおぶって、ナマケモノのお母さんは子ナマケモノをお腹に乗せて、カンガルーのお母さんは子カンガルーをお腹の袋に入れて、象のお母さんは子象を鼻で押して。でもシマウマの子はお母さんの後からついて、猪の子も後からついて、ハリネズミの子も後からついて、最後のページは丸くなって一緒に寝るシーンとなる絵本。

⑥「くだもの」平山和子／作 (福音館書店) 1979年

写実的な果物の絵。切る前の絵、切った後の絵、「さあどうぞ」と差し出す手先やお皿やフォーク等も写実的で本物そっくりに描かれ、最後のページで初めて、子どもが自分で皮をむいてバナナを食べる絵に「じょうずにむけたね」という語り掛けの言葉が添えられている。普段の生活で子どもが口にする果物を、まずはまるまるそのまま、次に切ったりむいたりした後を本物の様に描き表した絵が、子ども自身の「美味しそう」「食べたいなあ」「もっと食べたい」等という気持ちをかきたてる。

⑦「あそび」ヘレン・オクセンバリー／作 (文化出版社) 1981年

縦15cm横13、5cmの手の平サイズで、文字は一切ない。赤ちゃんが積み木を崩す姿、手押し車を押す姿、鍋底をお玉と泡立て器でたたき、段ボール箱に入り込んでにっこりする姿、絵本を逆さに見る姿、くまの縫いぐるみを抱く姿、立ち上がってボールを持つ姿、最後のページには次の絵本のテーマに続く、服を着て出かける準備をする「したく」の姿が描かれている。どの赤ちゃんでも必ず行うであろう身近な姿の絵に、思わず読み手も聞き手も引き込まれる。

⑧「じゃあじゃあびりびり」作・絵／まついのりこ（偕成社）1983年

車、犬、水道、紙、掃除機、ニワトリ、踏切、赤ちゃん、飛行機、猫、ラッパ、それぞれ子どもにとってとても身近な物・者の絵と文字に、適したオノマトペを書き加えて表している。二語文の書き方になっていることも、子どもにとって親しみを感じる絵本の作りとなっている。明るくくっきりした絵、リズムカルな言葉での表現法は、子ども達に長く繰り返し読み継がれる。

⑨「りんご」松野正子／文 鎌田暢子／絵（童心社）1984年

赤、黄色、ピンクのリンゴが、丸ごとひとつずつ写実的にとても美味しそうに描かれ、お母さんが3つのりんごの皮をむくと、りんごはみな白くなる。切って芯を取ってお皿に盛って、お母さん兄弟3人で食べると「ああ美味しい」。最後のページには、おそらく兄弟の祖父母がりんごを詰めて送っただろう青森県津軽の文字が入った段ボール箱。思わず本物のりんごが食べたくなる絵本である。

⑩「おひさま あはは」前川かずお／作（こぐま社）1986年

おひさま、木、小鳥、花、子犬、魚、母さん猫、子猫、蛇も蝶々もカタツムリも、皆がおおきな口を開けて笑っているけれど、僕の顔はちょっと怒っている。でもお母さんが抱っこすると、大きな口を開けて大笑い。表紙のおひさまの口と同じ形で、大きな口の笑顔になる。きっと聞き手の子どももつられて笑顔になるだろう。笑顔が見たくて読み手は聞き手を抱っこし、聞き手も抱っこをせがむだろう。

⑪「おつきさまこんばんは」作／林明子（福音館書店）1986年

猫が2匹家の屋根に登ると、夜空が明るくなって満月が出る。猫が「こんばんは」と挨拶した直ぐ後に、月は雲に覆われる。猫は雲に「だめだめ、お月さまが泣いちゃう、こないで、どいて」と言うと、雲は「お月さまとお話してたんだ、ごめんごめん」と謝り去っていく。また夜空に現れた月はまんまるでニコニコ笑っており、その様子を子どもも大人も眺める場面で終わる。表紙と裏表紙までもが、月の表情がとても印象的な絵本である。

⑫「がたんごとん がたんごとん」安西水丸／作（福音館書店）1987年

自動車は、貨車に次々と赤ちゃんの好きな食べ物や品物や動物を乗せていく。満員になるとちょうど終点となり、そこには食卓があって、赤ちゃん自身が降りた動物と一緒に食卓を囲む。自動車の表情は、眉と口元と眼で表され、微妙に時々で変わるが、終点でお客である食べ物達を降ろした後は、潔く表情を見せずに去る。子どもの大好きな乗り物、食べ物、動物の3種が登場することが人気の秘密と思われる。

⑬「かおかおどんなかお」作・絵／柳原良平（こぐま社）1988年

単純な丸を中心にした図形に、目、鼻、口を描いて、表情や形や色使いで色々な心情が表されている。この絵本を見た子どもは、笑う、泣く、怒る、眠る等の他、たくましい、困った、甘い、辛い、いたずら、すました、良い、さよなら、とその言葉の意味と顔の表情とをセットにして楽しみ、自分も同じ表情になってさらに楽しみを深めることだろう。

⑭「ぴょーん」まつおかたつひで／作・絵（ポプラ社）2000年

縦に開くページが、ぴょーんと飛ぶかえる、子猫、犬、バッタ、ウサギ、かたつむりは飛べない、女の子等の躍動的な姿を捉えた絵を更に活かしている。だるまさんの絵本シリーズと同様に、この絵本を子ども達と一緒に見ると、必ず子ども達は絵の真似をして、体中を思い切り伸ばして、ぴょーんと飛び上がる。子どもにとって、絵本と動きが相互に作用し合う、身体性に満ち溢れた楽しい絵本。

⑮「ママだいすき」まど・みちお／文 ましませつこ／絵（こぐま社）2002年

小ぞうも、ペンギンの子も、子ぶたも、小鳥も、子猫も、カバの子も、シマウマの子も、へびの子も、子ウサギも、金魚の赤ちゃん達も、子ぐまも、蝶々の子どもの青虫も、子ザルも、カンガルーの子も、皆ママが大好き。ママは、にこにこ笑顔で我が子と一緒にいて、ごはんをあげたり、いないないばあをした、かけっこしたり、お出かけしたり、抱っこしたり。母子の穏やかな日常が、穏やかな文と絵で描かれている。

⑯「とっとこ とっとこ」まついのりこ／作（童心社）2003年

見返しのページに先ずはとっとこの文字がでとっとこ歩いている様に描かれ、次の中表紙では、とっとこの文字が両足で地面に歩く様に描かれている。引き続いて、子どもに身近な動物や昆虫やロボット等が靴をはいてとっとこ歩き、皆で一緒にとっとこ歩くと最後は靴を脱いで「またあしたね」と去っていき夜になる。裏表紙には、明日またとっとこ歩くであろうニコニコした笑顔の

猫が脱いだ靴を眺めていて、読み手も聞き手も天気の良い時には靴を履いて、外にとっとこ出掛けたくなるだろう。

⑰「よくきたね」松野正子／文 鎌田暢子／絵（福音館書店）2004年

「おいで」とお母さんに呼ばれると、子いぬも、子ねこも、子ぶたも、子ぐまも、人間の赤ちゃんも、お母さんのすごそばに行き「よくきたね、いいこいいこ」と言って迎えらる。お母さんは必ず子どもの目線に合わせて子どもを「おいで」と呼び、呼ばれた子どもは、お母さんのそばに行けば必ず幸せな満たされた気持ちになる。読み手も聞き手も、読みながらホッと安心する絵本といえる。

⑱「くっついた」三浦太郎／作・絵（こぐま社）2005年

表紙にはお母さんと赤ちゃんのほっぺたがくっついた絵、めくると金魚の口と口、あひるのくちばしとくちばし、ぞうの鼻と鼻、さるの手と手、もう一度お母さんと赤ちゃんのほっぺた、最後にお父さんのほっぺたも赤ちゃんにくっついて、赤ちゃんは更に嬉しそうな笑顔になる。繰り返し、いろいろなものが何度もくっつく姿に、子どもは、自分が大人にほっぺたをくっつかせる安心感を覚えながら見入る。

⑲「ととけっこう よがあげた」こばやしえみこ／案 ましませつこ／絵（こぐま社）2005年

わらべうた「ととけっこう よがあげた」は、赤ちゃんが目覚める時に歌いたいわらべうたである、と紹介されており、裏見返しには楽譜も記載されている。この楽譜通りのメロディーではなくとも、リズムカルに、めんどりのお母さんになったつもりで、ひよこや、子猫や、子豚や、子牛や、子どもを起こせば、皆ご機嫌よく挨拶を交わしてニコニコ起きる。優し気なめんどりの表情や様子に、読み手も聞き手も癒される。

⑳「まるてん いろてん」中辻悦子／作（福音館書店）2006年

カラフルなまるが2個、次に3個登場。まるのひとつが大きくなって「あーん」と食べる顔。形が変化して「もぐもぐ」「にっこり」の顔。まるが9個集まってくっついて、次にはまるも文字も大きくなってくっついて、小さくもくっついて、次には小さい順から大きい順に並んだまる、てんてん。最後に、まるは皆離れて飛んでいく。白地に赤、青、黄色、紫、緑、オレンジ、の6色のまるがページをめくる度に並びや大きさが変わって出てくるシンプルなデザインで、まるだけで表現された動きのリズムの面白さが伝わってくる。

㉑「くらいくらい」長谷川摂子／作 柳生弦一郎／絵（福音館書店）2006年

真っ黒な姿の何か「電気をつけてちょうだい」と言い、次のページでニコニコ笑顔で現れる小鳥、カエル、犬、その次はめくっても電気がつかず、再挑戦して笑顔で現れる子猫、最後はバナナを食べるサル、裏表紙には出演者皆が真っ黒な姿で肩を組んでいる。子どもにとって、影絵になって登場する動物たちを想像する楽しみや、言い当てて嬉しい気持ちがたっぷり味わえる仕掛けの絵本である。

㉒「ぼんぼんポコポコ」長谷川義史／作、絵（金の星社）2007年

だれのおなかかな？と表紙カバーに書かれており、これから始まるストーリーにワクワクする。本文は大きな文字で「ぼんぼん」おなかとおへそと叩く両手、猫、狸、ゴリラ、カエルは自分でおなかを叩き、赤ちゃんのおなかはお父さんが叩く。そしてお母さんが赤ちゃんのおなかを「ないない」と服で覆って、おしまい、となる。お父さんとお母さんと赤ちゃん、親子のほっこりした幸せな気持ちが伝わってきて、この絵本を見た誰もがほっこり幸せな気持ちになる。

㉓「かにこちゃん」きしだえりこ／さく ほりうちせいいち／絵（くもん出版）2008年

主人公のかにこちゃんを始め、赤色が印象的な絵本。「おはよう」とかにこちゃんはおひさまに挨拶すると、おひさまも「おはよう」と挨拶を返す。かにこちゃんは、大好きな海の波間や砂山で友達と一日楽しく遊び、砂山の上から眺めた夕焼け、燃えるようなおひさまや海と一緒に遊んだ友達に「さよなら」と挨拶して、穴の家に帰る。シオマネキという種類の蟹の爪の特徴を活かして、波を呼んだり友達を誘ったりさよならをしたりする姿が描かれ、まるで絵が動いているような印象を受ける。

㉔「あっ」中川ひろたか／文 柳原良平／絵（金の星社）2008年

のりものだいすき、のりド文から始まり、「あっ」と道で見つけた車の運転手になって進んでいくと、次は線路上の電車を見つけて運転手になり、次に進んでいくと海で大型船を見つけて船長になって進んでいくと、最後は飛行機を見つけてパイロットになって「ばいばい」と空を飛んでいく。のりものを見つければ、直ぐにそれに乗りたい子どもの気持ちや、違う乗り物を見つけてびっくりして、さらに嬉しい子どもの気持ちが、繰り返しの同じ表情と指差しとばいばいと振る手の絵に上手く表されている。

②⑤ 「だるまさんが」かがくいひろし／作（ブロンズ新社）2008年

だるまさんには、手と足が描かれており、「だるまさん」の言葉と共に左右に体が揺れる。ページをめくると予想外に「どてっ」「ぶしゅー」「びろーん」といろいろな動きをして、読み手も聞き手も思わず笑顔になる。子ども達は、だるまさんの動きに合わせて、体中でどてっどてっ床に転んだりびろーんと伸びたり、夢中でこの絵本の主人公だるまさんになりきり、絵本を身体全てを使って楽しむことが出来る。

②⑥ 「だっだー」ナムーラミチヨ／作（主婦の友社）2010年

赤ちゃんの言葉遊びとして、「だっだー」「ぎーじ、いーじ」「べっれー、でっれー」等の擬音語が、カラフルな色合いの粘土で作った、愉快的な表情の顔に添えて書かれている。顔の輪郭、目、鼻、口、舌、のみでの表現が、擬音語とマッチして印象深い。作者は、特にストーリーがあるわけではないので、どのページからでも、聞き手の赤ちゃんがお気に入りのところから読んで（見て）楽しんで、と語っている。

②⑦ 「ぼんちんぱん」柿木原政広／作（福音館書店）2010年

食パン、目と口の形をちぎった食パン、ロールパン、目と口の形をちぎったロールパン、ドーナツ、目の形をちぎったドーナツ、フランスパン、目と口の形をちぎったフランスパン、あんぱん、目と口の形をちぎったあんぱんが「ぼんちんぱん」と紹介される。写実的な絵、ニコニコ楽し気な表情にちぎられるパンを見れば、誰もが思わず美味しいパンが食べたくなるだろう。

②⑧ 「ふたごのしろくま ねえ、おんぶのまき」あべ弘士／作（講談社）2012年

双子のしろくまは、おんぶされている他の動物の赤ちゃんたちが羨ましくてかあさんにおんぶをせがむが、かあさんはそれぞれの動物の赤ちゃんが、「生まれたばかりだから」「卵からでてきたばかりだから」「泳ぎがへただから」「抱っこだから」「乗っているから」と言って取り合わない。でも双子のしろくまが上手に泳いだ後くたびれると、ちゃんとおんぶしてくれる。おんぶして欲しい聞き手の子どもの想いを裏切らない結末に、読み手もほっと一安心する。

②⑨ 「あ・あ」三浦太郎／作、絵（童心社）2013年

2文字で、赤ちゃんがおはなしして楽しい気持ちになる物と者が次々に出てくる。「もも（桃）、くく（靴）、ぶぶ（水またはお湯または飲み物）、みみ（耳）、てて（両手）、ここ（鶏）、ぴび（ひよこ）、ばば（パパ）、ママ（ママ）、ふふ（笑った赤ちゃんの顔と手）。絵を指差したり、おはなししたり、ニコニコ笑ったり、聞き手が小さな赤ちゃんでも、とても親近感を抱く絵本の一冊といえるだろう。

③⑩ 「しっぽがびん」おくはらゆめ／作（風濤社）2015年

しっぽがびん、しっぽがたたり、びんもたたりも両方とも上手なきつね、猫の親子、亀の親子。びんとしたしっぽもたたりとしたしっぽも、誇らしげに見たり見せたりする動物たち。最後のページ「あっぱれ」の言葉通り、読み手も聞き手の子どもも、思わずなんともユーモラスなストーリー展開に引き込まれて、この絵本のとりこになるに違いない。